

学位論文要旨

保育所における連絡帳を通じた連携に関する研究

—食事に焦点を当てて—

伊藤 優

広島大学教育学研究科

2016 年

1. 論文題目

保育所における連絡帳を通じた連携に関する研究
—食事に焦点を当てて—

2. 論文構成

序章 研究の背景と目的

第一節 研究の背景

第二節 保育所における保育士と保護者の連携に関する先行研究の検討

第三節 連絡帳に関する先行研究の検討

第四節 研究の目的と方法

第一章 保育所の連絡帳を通じた保育士と保護者の連携における乳幼児の食事

第一節 乳幼児にとっての保育所の給食

第二節 乳幼児の食事支援の課題

第三節 食事に焦点をあてた保育士と保護者の連携

第二章 対象と方法

第一節 研究対象

第二節 研究方法

第三節 分析枠組み

第三章 子どもの食事に悩みを持つ保護者と保育士とのやりとり

第一節 分析の視点

第二節 食事量の少なさを気にする1歳女児の母親と保育士のやりとり(事例Ⅰ)

第三節 極度の偏食を持つ年少クラス在籍男児の母親と保育士のやりとり(事例Ⅱ)

第四節 小括

第四章 子どもの食事に悩まない保護者と保育士とのやりとり

第一節 分析の視点

第二節 生後2ヶ月入所女児に対する母親と保育士のやりとり(事例Ⅲ)

第三節 離乳食開始時期の女児に対する母親と保育士のやりとり(事例Ⅳ)

第四節 外国籍1歳女児に対する母親と保育士のやりとり(事例Ⅴ)

第五節 小括

終章 総合考察

第一節 本研究で得られた知見

第二節 本研究の意義と特色

第三節 本研究の限界と今後の展望

引用文献

資料

3. 論文概要

序章 研究の背景と目的

近年、核家族化やライフスタイルの変化に伴い、保育所を利用する家庭が多くなっている。保育所に通う子どもは在園時間が長く、保育所も家庭と同様に生活の基盤となっていることから、保育所と家庭それぞれの場での子どもの情報が重要な意味を持つ。保育所を利用する保護者は共働きで時間的・精神的に余裕がない場合も多く、保育士が保護者と連携して子どもに支援することの重要性や必要性について、保育所保育指針や多くの先行研究で明示されている（例えば、Kieff, & Wellhousen, 2000；師岡, 2010；Gonzalez-Mena, 2013a）。

保育士が保護者と連携して子どもに支援することによる効果は多くの先行研究で指摘されている（Gonzalez-Mena, & Bhavnagri, 2000；Deborah, 2001；片山, 2010）。特に保育所では成長発達の著しい乳児も長時間預かることから、保育士は保護者と連携することにより、その日の活動や体調の変化に合わせた支援を行うことが可能となる。また、保護者にとっても子育てに関する知識の獲得や新たな子どもの捉え方の発見など子育て支援や保護者支援にもつながる可能性を有していることが示されている（高尾・足立・松本・池本, 2010；島津, 2014）。保育所を利用している母親の中には仕事と子育ての両立の難しさから育児ノイローゼに陥ったり、他の保護者と関わる時間が少ないことから孤立傾向が強いことが明らかにされている（田中, 1997；中谷, 2006；上田, 2007）。また、関島（2012）は、保育所に子どもを預けている保護者は、身体不調症状を抱えていてもその多くが育児や仕事を休めない状況であることを報告している。そのため、保護者の負担や悩みを軽減するためにも、保育士がどのような役割を担うかが問われており、その中でも保育所における保育士と保護者の連携を検討することが重要な意味を持つ。

一方で、実際の保育所における保育士と保護者の連携には課題も多い。その一つとして、連携方法の課題があげられる。保育士が保護者と連携して子どもに支援する手段としては、親子体験教室などのイベント的な取り組みや、園便り・給食便りといった保護者への配布物など様々な方法がみられる。しかし、保育所に子どもを預ける保護者は仕事を抱えており、イベント的な取り組みに出席することが難しい場合も多い。また、小口（2009）が指摘するように、配布物は保育所から家庭への一方向的な情報の提供になっているため、保育士が家庭での子どもの情報や保護者の考えを知ることはできない。以上のことから、保育士と保護者の間で日常的・双方向的に情報を受け渡すためにも、子どもの送迎時や行事時などに保育士と保護者が直接会って行う会話が重要となるが、時間に制限のある保育所を利用する保護者や一度に多くの子どもに対応している保育士にとって、会話をする時間的ゆとりがない場合が多く、十分な情報交換は困難である。このような現状の保育所を利用する保護者と保育士が連携して子どもに支援する際に、日常的に用いられているものとして連絡帳が挙げられる。

連絡帳に関する先行研究として、例えば二宮(2010)は、ナラティブ分析を用い、連絡帳の

記述内容を検討することで、保護者による高い信頼を得たクラスとそうでなかったクラスの保育士の記述の特徴を示しており、広沢・清水・角藤(1996)は、保育士と保護者に対する質問紙調査から、保育所での連絡帳の使用状況を明らかにしている。このように、連絡帳の先行研究は保育士と保護者の記述スタイルや連絡帳に対する両者の意識について検討しているものが多い(高杉, 2009; 高・若尾, 2015; 林, 2015; Gonzalez-Mena, 2013b)。しかし、先行研究において保育士と保護者のやりとりを記録したものとして連絡帳を検討したり、そのやりとりを保護者支援という視点で捉えてはいない。また、実際の子どもの状況を考慮することなく保育士と保護者のやりとりを検討しているため、保育士が連絡帳を用いて保護者と連携して子どもに支援することが、保護者と子どもにどのような影響を与えるのかという一連の過程は明らかにされていない。近年、保育所を利用する保護者が多くなっていることから、連絡帳を用いて保育士が保護者と連携して子どもを支援する様相を検討することが必要となるであろう。

そこで、本研究では食事に関する連絡帳での保育士と保護者のやりとりに焦点を当てる。食事は基本的な生活習慣として、保育所でも家庭でも毎日行われている行為である。一方で、食事は偏食や立ち歩きなど程度の差はあっても多くの子どもが課題を有している(河原, 2004; 2009)。特に保育所を利用している母親は、限られた時間の中で子どもに料理を提供し、共に食べることが多いことから、食事は子どもの日常生活の中でも子育てで最も多く悩みを抱えている行為であり、連絡帳の記述の中でも食事に関する内容は多くを占めている(今井・中村, 1990; 後藤・鈴木ら, 2007; 林, 2009)。また、保育所には共働き、一人親、体調不良などから子育てを十分に行えない保護者など様々な家庭状況の保護者が保育所を利用している。食事は一日の活動や生活リズム、保護者の食事観などとも深く関わっていることから(江田, 2006)、食事に焦点を当てることは保育所を利用している保護者の家庭状況や子育て意識を反映することにつながると考えられる。そのため、食事に焦点を当てることで、保育所を利用する様々な家庭状況の保護者に対し、保育士が連絡帳を用いてどのように連携しようとしているのか導き出せると推察される。

以上のことから、本研究では、食事に焦点を当てた連絡帳での保育士と保護者のやりとりを検討することによって、保育士が保護者と連携して子どもに支援する様相を明らかにする。具体的には、次のような手順で研究を行う。

第一に、連絡帳の記述内容の中でも食事に焦点を当てる理由及びその必要性を明示する(第一章)。そのため、乳幼児の食事に関する概念及び現状、保育所の食事に関する連携の必要性や課題を示す。

第二に、食事に焦点を当てた連絡帳が保育所を利用する保護者や保育士にとってどのような役割を有しているのかを明らかにする(第二章)。保育所に子どもを預ける保護者や保育士にとって、連絡帳の重要性が指摘されている一方で、連絡帳による保育士と保護者の負担等も報告されている(広沢・清水・角藤, 1996)。そこで、連絡帳内容を食事に焦点を当てることによる有効性や活用の可能性について示唆を得る。

第三に、食事に焦点を当てた連絡帳での保育士と保護者の一連のやりとりから、保育士が保護者と連携して子どもに支援することが、保護者と子どもにどのような影響を与えるのか明らかにする（第三章・第四章）。以上を踏まえて、保育士が保護者と連携して子どもに支援する様相を明らかにする（終章）。

第一章 保育所の連絡帳を通した保育士と保護者の連携における乳幼児の食事

本章では、先行研究から乳幼児の食事に関する概念及び問題背景、保育士が食事に関して保護者と連携して子どもに支援する必要性や課題について明らかにする。

食事は基本的な生活習慣であるが、家庭の保護者の考え方に強く影響を受けやすく、保育所を利用する乳幼児の食事に関しては欠食や過食、栄養不足など多くの課題が指摘されている（大森・八倉巻・高石, 2000；後藤・鈴木ら, 2006；松生・佐田ら, 2007；大岡・内海・向井, 2013）。このような現状を踏まえ、平成 20 年告示の保育所保育指針では乳幼児の食事の重要性が明示されるとともに、様々な指針やガイドラインにおいて保育所の給食場面における保育士の支援が重要視されている。

このように、保育所の給食場面における保育士の支援に対する期待が高まる一方で、多くの保育士が保育所だけで子どもを支援することに困難を抱えていることも報告されている（伊藤, 2013；伊藤・七木田, 2014）。保育所の給食場面における子どもの行動は、保護者の食事観や職場環境、子どもが生きる文化形態など、子どもと直接かかわりのない他者やモノなども含め、それらが影響しあって個別に規定されている。子どもは保育所と家庭の食事場面で同様の行動を取っているとは限らず、その場によって行動を変えている実状が報告されている（吉田, 2012；河原・根ヶ山, 2014）。つまり、保育所又は家庭それぞれの食事場面でしか得られない子どもの情報が存在する。そのため、保育士と保護者は、両者の子どもの食事に対する考えやねらいも含めそれぞれの場での子どもの情報を両者が双方向的に提供し合うことによって、子どもの食事に関わる様々な要因に配慮した支援が可能になると考える。以上のことから、食事に関する保育士と保護者の連携した子どもへの支援を検討することが急務の課題となっている。

第二章 対象と方法

本章では、保育士へのインタビュー調査から、「食事の連絡帳」の概要及びそれをを用いるようになった経緯、活用方法について示すとともに、保育士と保護者の「食事の連絡帳」に対する意識をインタビュー調査及び質問紙調査から明示する。また、本研究の方法について示す。

本研究の対象園である M 保育所と T 保育所は「食事の連絡帳」を用い、保育士と保護者間で情報交換を行っている。「食事の連絡帳」は、食べたものや食べた量、睡眠時間などを記述する欄（以下、上段）と日常の気づきや相談などを記述する連絡事項欄（以下、下段）を設け、保護者に対しては最低限上段を記述するだけにとどめることにより、保護者の負担

を軽減している。「食事の連絡帳」は、3歳未満入所児の増加に伴い、乳児クラスの子どもの食事に関して調理師と保育士、保育士と保護者の連携がうまくとれない現状が生じ、その解決のために主任保育士が乳児クラスの担当となり、作成したものである。「食事の連絡帳」は主に乳児クラスで使用されているが、幼児クラスで使用することもある。

このような、「食事の連絡帳」を保護者がどのように捉え、活用しているのかを明らかにするため、質問紙調査を実施した。調査期間は、20XX年7月初旬から中旬であった。調査対象者はT保育所とM保育所において「食事の連絡帳」の使用経験がある保護者であり、有効回答率は90.1%（64名）であった。調査項目は、子どもの食事に関する保護者の悩みの程度、及び連絡帳の各項目についての情報の伝達状況や連絡帳使用の負担感等について質問した。その結果、保育士が「食事の連絡帳」を通して園での様子を詳しく伝えることで、保護者の連絡帳を書く際の負担感や子どもの食事に関する保護者の悩みに影響を与える可能性が示唆された。さらに、「食事の連絡帳」を通して子育ての不安軽減や保育士とのつながり、「食事の連絡帳」使用の楽しさと関係があった連絡帳の項目は、全て食事に関してであった。つまり、保育所での子どもの食事の様子が保護者に伝わることは、保護者にとって食事も含めた子育ての不安軽減や保育士とのつながり、連絡帳使用への楽しさに効果を有していることが示された。

本研究の調査対象として、子どもの食事に悩みを持つ保護者と悩みを持たない保護者という対極の二つのタイプで保護者を分け、「食事の連絡帳」での保育士と保護者のやりとりを検討することで、保育所を利用する多様な家庭環境の保護者と保育士が連携して子どもに支援する様相を明らかにする。なお、本研究で対象とする「食事の連絡帳」の保育所側の記述者は、全事例においてM保育所の主任保育士であった。研究方法として、子どもの食事の変容過程を明らかにするため、一週間に一回の割合で保育所のおやつ場面と給食場面を観察した。さらに、毎回観察後、主任保育士に、子どもの食事の様子及び、子どもや母親に対しての保育士の支援等についてインタビューを行った。そして、「食事の連絡帳」での保育士と保護者の記述、観察、主任保育士へのインタビューから、子どもの食事時の行動をラベル化し、それらを主任保育士とともに時系列に並べ、特徴ごとに時期区分した上で、それぞれの時期における保育士と保護者の「食事の連絡帳」でのやりとりを検討した。

なお、「食事の連絡帳」での保育士と保護者のやりとりを検討する際は、分析枠組みとして、ハーバーマスの相互行為の発達段階論（ハーバーマス, 1981; 1983）を参考に、「権威・利害段階」（権威や利害に左右される）、「役割・規範遂行段階」（お互いの役割を遂行したり規範に従う）、「相互了解段階」（目的や関心を共有した上で、協働的になされる）と捉えて検討する。そして、連絡帳での保育士と保護者のやりとりをこれら各段階の特徴と照らし合わせ、異なる段階の特徴がみられた場合、他の段階に移行したものとみなし、連絡帳への保育士と保護者の記述とそれに伴う子どもの食事の様子との関連から段階の移行要因を明示する。

第三章 子どもの食事に悩みを持つ保護者と保育士とのやりとり

本章では、保育士が子どもの食事に悩みを持つ保護者と「食事の連絡帳」を用いて連携して子どもに支援する一連の過程が、保護者と子どもにどのような影響を与えるのか明らかにする。

(1) 食事量の少ない女児の母親と保育士とのやりとり

女児 K の母親は、高齢で出産した第一子である女児 K をとてもかわいがっていた。そのため、女児 K の母親は女児 K に関して少しのことでも不安や心配を持ちやすく、食事にも悩みを持っていた。調査期間は女児 K が入所した 20XX 年 7 月中旬から 20XX 年 11 月初旬までとした。連絡帳の総記述日は家庭・保育所共に 67 日分（合計 134 件）であり、観察日数は計 17 日（約 2550 分）であった。そして、女児 K の食事の変容（食事ラベル 17 個）に伴う「食事の連絡帳」での保育士と母親のやりとりを検討した結果、保育士と母親のやりとりは「役割・規範遂行段階」から「相互了解段階」への移行がみられた。このような各段階でのやりとりの様相及び移行を促した要因として、以下のことが明らかとなった。

「役割・規範遂行段階」における女児 K の母親は、保育士の直接的なアドバイスや忠告などに対して返答しなかったり、話題を避ける傾向が強かった。女児 K の母親はフルタイムで仕事をしていても女児 K に精一杯関わっていることは毎日詳細に記述される連絡帳からも読み取ることができる。このような母親にとって、保育士からのアドバイスは一方的な指導や指示として捉えやすく、自身の頑張りが否定された感覚に陥ったと推察される。その結果、それぞれの場でお互いが自分なりに女児 K への支援を行っており、双方の女児 K に対する支援が平行線をたどっている様相が見受けられた。

その後、母親が保育士のアドバイスを受け入れ、味を変えるようになったことにより、女児 K はさらに食事量を増加させ、食べられるものも多くなった。このような女児 K に対して、母親は食事だけでなく女児 K の成長も実感し、それを喜ぶようなコメントを記述するようになり、連絡帳でのやりとりは「相互了解段階」に移行した。以上のことから、「食事の連絡帳」を使用することによる保育士と母親の関係性の変容が、女児 K の食事量や食事内容の変容をもたらし、このことが、母親に食事に止まらない子育てに対する安心感を与えていたといえる。

(2) 極度の偏食を持つ年少クラス在籍男児の母親と保育士のやりとり

年少クラスに在籍する男児 R は自閉症と診断されており、入所当初の男児 R は極度の偏食で、給食時間中も大声をあげて逃げ出すことが多かった。このような男児 R の食事に対し、母親は強い不安を持っていた。調査期間は男児 R が入所した 20XX 年 4 月初旬から保育士が「食事の連絡帳」の使用を止めてもよいと判断した 20XX 年 12 月末までとした。連絡帳の総記述日は家庭・保育所共に 144 日分（合計 288 件）であり、観察日数は計 23 日（合計約 2070 分）であった。そして、男児 R の食事の変容（食事ラベル 15 個）に伴う「食事の連絡帳」での保育士と母親のやりとりを検討した結果、保育士と母親のやりとりは「役割・規範遂行段階」から「相互了解段階」に移行後、「権威・利害段階」に移行し、最終的

にもう一度「相互了解段階」に移行した。このような、各段階でのやりとりの様相及び移行を促した要因として、以下のことが明らかとなった。

年少児になるとマナーやルールを守って一人で食べることができるようになるが（外山, 2008）、男児 R は他児と比べ極度の偏食や立ち歩きが顕著に表れていた。そのため、「役割・規範遂行段階」での母親は子どもの食事に対してネガティブな面ばかりに目が向いている様子が連絡帳の記述から読み取れた。しかし、保育士が連絡帳を通して食事に関する男児 R のポジティブな様子を伝え続けたことによって、母親は男児 R の食事量や食べられる食材の増加に気づき、その後、母親の連絡帳の記述はポジティブな内容が多くなり、保育士と母親の連絡帳でのやりとりは「相互了解段階」に移行した。「相互了解段階」での母親の連絡帳の記述内容から、男児 R の食事量の増加が不安の強い母親に安心感をもたらし、母親の子どもに対する視点の変容や子どもへのかかわりの見直しを促していたといえる。

その後、男児 R が暑さの影響で一時的に食事量が少なくなると、保育士と母親のコメントの記述は少なくなり、「権威・利害段階」に移行した。しかし、連絡帳を通して一度男児 R の食事に関して安心感を持つことができた母親に、この時期焦りや不安を表すような連絡帳の記述はみられず、連絡帳のコメントの少なさに母親の安心感や保育士への信頼感が表れていたと考えられる。そして、連絡帳でのやりとりで母親が男児 R の食事に余裕を持てるようになったからこそ、保育士と母親の連絡帳でのやりとりは、食事中の他者とのかかわりや男児 R の言葉の発達など食事以外の内容にまで広がり、再度「相互了解段階」に移行したと考えられる。このような男児 R の食事に関する母親の不安の減少が、男児 R の食事中の行動の落ち着きに影響を与えていた。

以上の二事例から、子どもの食事に不安が強い保護者に対して、保育士は「食事の連絡帳」を通して子どもの食事量や食事内容の変容に気づかせることで、保護者に子育てに対する安心感を与えたり、保護者の子育てのストレスを軽減させていた。

第四章 子どもの食事に悩みを持たない保護者と保育士とのやりとり

本章では、保育士が子どもの食事に悩みを持たない保護者と「食事の連絡帳」を用いて連携して子どもに支援する一連の過程が、保護者と子どもにどのような影響を与えるのか明らかにする。

(1) 生後 2 ヶ月入所女児に対する母親と保育士のやりとり

女児 A の母親は、入所当初体重が極端に少なく、ミルクも他児の半分以下しか飲んでいない女児 A に対して、全く気にしていないこと、及び全て保育所に一任する考えであることを保育士に示していた。対象とする期間は女児 A が入所した 20XX 年 10 月中旬から離乳食を問題なく食べられるようになった 20XX+1 年 8 月初旬までであった。連絡帳の総記述日は家庭・保育所共に 179 日分（合計 358 件）であり、観察日数は計 34 日（約 5100 分）であった。そして、女児 A の食事の変容（食事ラベル 18 個）に伴う「食事の連絡帳」での保育士と母親のやりとりを検討した結果、保育士と母親のやりとりは「権威・利害段階」か

ら「役割・規範遂行段階」への移行がみられた。このような各段階のやりとりの様相および移行の要因として以下のことが明らかとなった。

「権威・利害段階」での女兒 A の母親は、離婚直後で時間的・精神的に余裕がない中でも、保育士から最低限の記述として求められている連絡帳上段の食事量と食事時間のみ毎日記述していたが、保育士からの連絡帳下段の記述に対して返答することはなかった。しかし、保育所と家庭でのミルク量の違いに母親が気づいたことがきっかけとなり、母親は連絡帳を通して保育士に質問や相談を行うことが多くなった。そして、その時々連絡帳での保育士の意見を無批判に受け入れ、従っている様子が連絡帳記述から読み取られた。

その後、女兒 A の食事量の増加に伴い、母親は女兒 A のミルク離れの時期について、自分の考えを示すようになった。すると、保育士は表面的には母親が自分の考えで女兒 A の子育てを行っているように見せながら、「食事の連絡帳」を用いて適宜家庭の食事に関して軌道修正を試みており、この時期の保育士と母親のやりとりは、「役割・規範遂行段階」に移行したといえる。保育士は母親の女兒 A に対するかかわりの変容を尊重しつつも、保育士と母親の意見の違いに対し、保育士は母親を見守る形で落としどころを探っているのではないかと考えられる。このように、母親の女兒 A に対するかかわりの変容に伴い、保育士も連絡帳の記述を変容させていた。そして、保育士が連絡帳を通して女兒 A の水分量や体調などを考慮しながら女兒 A のミルク離れをサポートしたことによって、女兒 A は徐々にコップで牛乳やお茶を飲むようになり、女兒 A の食事内容に変容がみられた。

(2) 離乳食開始時期の女兒に対する母親と保育士のやりとり

女兒 B は入所当初 7 ヶ月であり、ミルクから離乳食に移行する時期であった。女兒 B はミルクはよく飲んでいたのであるが、保育所の離乳食は少量しか食べることができなかった。対象とする期間は、20XX 年 12 月初旬から 20XX+1 年 8 月初旬であった。連絡帳の記述日は、家庭 75 日、保育所 170 日（合計 245 件）であり、観察日数は計 26 日（約 3900 分）であった。そして、女兒 B の食事の変容（食事ラベル 15 個）に伴う「食事の連絡帳」での保育士と母親のやりとりを検討した結果、両者のやりとりは全期において「権威・利害段階」に止まっていた。

その要因として、保育士の記述の仕方が挙げられる。母親は女兒 B の食事量の増加に伴い、連絡帳の記述も増えていった。しかし、主任保育士と異なる保育士が連続して記述した後、母親は上段も記述しなくなった。その後、再び主任保育士が記述するようになっても、母親の継続した記述にはつながらなかった。

主任保育士は連絡帳の母親の記述から前日の女兒 B の家庭の様子を踏まえた上で女兒 B の給食の様子などを詳細に記述していたが、他の保育士がそのような記述をすることは少なかった。そのため、母親は自分の記述に触れられない限り、記述の必要性を感じなかったのではないかと考えられる。そして、母親は一旦記述を止めると、甘えが生じ、再び継続した記述を行うことは難しかったのではないかと推察される。

(3) 外国籍 1 歳女児の母親と保育士による連絡帳でのやりとり

女児 E と母親はペルー国籍であり、母親は日常的な日本語も話すことが難しかった。そのため、食事の連絡帳もポルトガル語（後スペイン語）で書かれたものを用いていた。入所当初、女児 E は給食をほとんど食べることができなかつたため、しばらくの間ミルクで栄養を補給していた。このような女児 E の状況に対して、母親は保育所に一任する傾向が強かった。対象とする期間は、女児 E が M 保育所に在籍した 20XX 年 9 月初旬から 20XX+1 年 4 月下旬であった。連絡帳にどちらか一方でも記述した日は 101 日であり、観察日数は計 28 日（約 4200 分）であった。そして、女児 E の食事の変容（食事ラベル 11 個）に伴う「食事の連絡帳」での保育士と母親のやりとりを検討した結果、両者のやりとりは全期において「権威・利害段階」に止まっていた。このような発達段階が移行しなかつた要因として、以下の二つが考えられる。

一つ目の要因として、保育士は母親との使用言語の相違という大きな問題の解決に重点を当て支援しすぎたことがあげられる。保育士は母親が記述しない理由を言語の問題として捉えており、ローマ字やスペイン語などを混ぜながら母親が読めるように配慮している。しかし、言語の問題に重点を置きすぎた支援を行った結果、子どもの食事に関心を示さない母親の実態を見過ごすことになり、母親の継続した記述が促せなかつたと考えられる。

二つ目の要因として、保育士の「食事の連絡帳」へのこだわりがあげられる。連絡帳でのやりとりから、保育士が「食事の連絡帳」を用い、母親に子どもの食事に興味・関心を持ってもらおうと行動すればするほど、母親が保育士を避ける結果に陥っている様相が見受けられた。つまり、保育士からの暗黙的な連絡帳使用への要求が母親にプレッシャーを与え、継続した記述につながらなかつたと考えられる。

以上の三事例から、子どもの食事に興味を持たない保護者に対しては、連絡帳を用いて時間がない中でも保護者が子どもと向き合い、触れ合う場を強制的にでも作り出すことが、親としての自覚を持たせることにつながっていた。一方で、食事に焦点を当てた連絡帳を用いた連携の課題として、保育士が母親の状況に応じて記述を工夫しなければ、母親に継続した記述を促せないだけでなく、時間的・精神的に余裕を持ちにくい保護者に過度なプレッシャーを与える危険性が示された。

終章 総合考察

(1) 本研究で得られた知見

本研究では、保育士が保護者と連携して子どもに支援する様相を明らかにすることを目的に、食事に焦点を当てた連絡帳での保育士と保護者のやりとりを検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。

第一に、保育士が保護者と連携して子どもに支援する際、保育士と保護者及び子どもがそれぞれ影響し合いながら変容していることが明らかとなった(図 1)。保育所を利用する保護者の中には、子どもに関して心配しすぎたり、子どもにかかわることを重要視していな

い保護者の実態が存在し、このような保護者に対し保育士がアドバイスを行っても保護者は避けたり、反発することが多かった。しかし、子どもの変容に保護者が気づくことで、連絡帳を通して保育士のアドバイスを受け入れたり、子どもについて自分の考えを述べるようになった。また、保育士も保護者の記述の変容に伴い連絡帳の記述を工夫していた。そして、このような連絡帳での保育士と保護者の関係性の変容が、子どもの行動に落ち着きをもたらし、さらに保護者に精神的な余裕を与えるものとなっていた。以上のように、連絡帳を用いた保育士と保護者の関係性や子どもの変容から、保育士と保護者の連携した子どもへの支援は、子どもの行動や保護者の子どもの捉え方の変容によって、柔軟に変容しうるものであることが示された。一方で、保育士が保護者の状況に応じて支援を柔軟に変容させることができない場合、連携に困難を生じさせるだけでなく、結果的に両者の関係を複雑にする要因にもなり得ることが示唆された。

第二に、子育て支援に対する連絡帳の位置づけ及びその効果をもたらした連絡帳の特性を明示した。子育て支援をもたらす連絡帳の特性として、以下の三点が示された。一点目として、連絡帳は、記録物として、日々の子どもの成長・発達の過程と毎日繰り返される保育士や保護者の子どもに対するかかわりが記録されていることがあげられる。そのため、保護者は、連絡帳の記述から、過去と現在の子どもの様子を比較しながら客観的に子どもの変容を捉え、子どもの成長を発見するとともに、保護者自身の子どもへのかかわりを修正する契機となっていた。二点目に、連絡帳は保育士と保護者の双方向的な情報交換が可能であるため、保育士から保護者への支援が指示的になりにくいといえる。そのため、保育士は、表面上連絡帳で保護者と情報交換をする中で、保育士と保護者間の上下関係を隠微させながら、保護者に無意識の学習を促すことができていた。三点目に、連絡帳は保育士と保護者が日常的に使用する道具であるため、連絡帳の記述の中で、保育士は保護者の状況を踏まえながら、さりげなく何度も保護者にアドバイスをしたり指示を出すことができていた。保育士は、以上のような特性を有する連絡帳を用い、意図的に保護者に行動変容を促し、保育士と保護者の関係性に変容をもたらすことで、保護者支援や子育て支援にもつながる効果を生じさせていたと考えられる。

第三に、保育士が保護者と連携する際の食事の特性を示した。乳児期のように、食事内容や食事時間などが保護者の判断に依存している場合、子どもの食事は保護者の生活習慣や行動と密接に関わり、子どもの生活リズムを作っている。そのため、子どもの食事改善を目指した連絡帳での保育士と保護者のやりとりが、保護者の生活習慣の見直しに伴う子どもの生活リズムの改善をもたらし、子どもの日々の行動に落ち着きを生じさせていることが示された。保育士と保護者の関係性に変容する際、保護者が子どもの変容に気づくことが必要であったが、以上の食事の特性から、連絡帳の記述を食事に焦点を当てることで、保護者が子どもの変容に気づききっかけを作りやすかったといえる。また、このような乳児期の食事の特性から、保護者にとっては自身の支援で子どもが変容したという達成感を持ちやすく、保育士は連絡帳を通して、保護者の子育てに対する意欲を喚起させることが

可能となっていた。

多様な家庭環境や生活状況の保護者が保育所を利用していることから、多くの保育士が保護者との連携に苦慮していることが報告されている（斎藤・中津・栗飯原, 2008；白石, 2014）。本研究において、連絡帳が保育士と保護者の関係性の変容に伴い、保育士が保護者と連携して子どもを支援する際の媒介や保護者支援にもなり得る可能性を明らかにしたことは、保育所を利用している保護者との連携に苦慮している保育士にとって、今後活用可能な知見になり得るのではないかと考えられる。

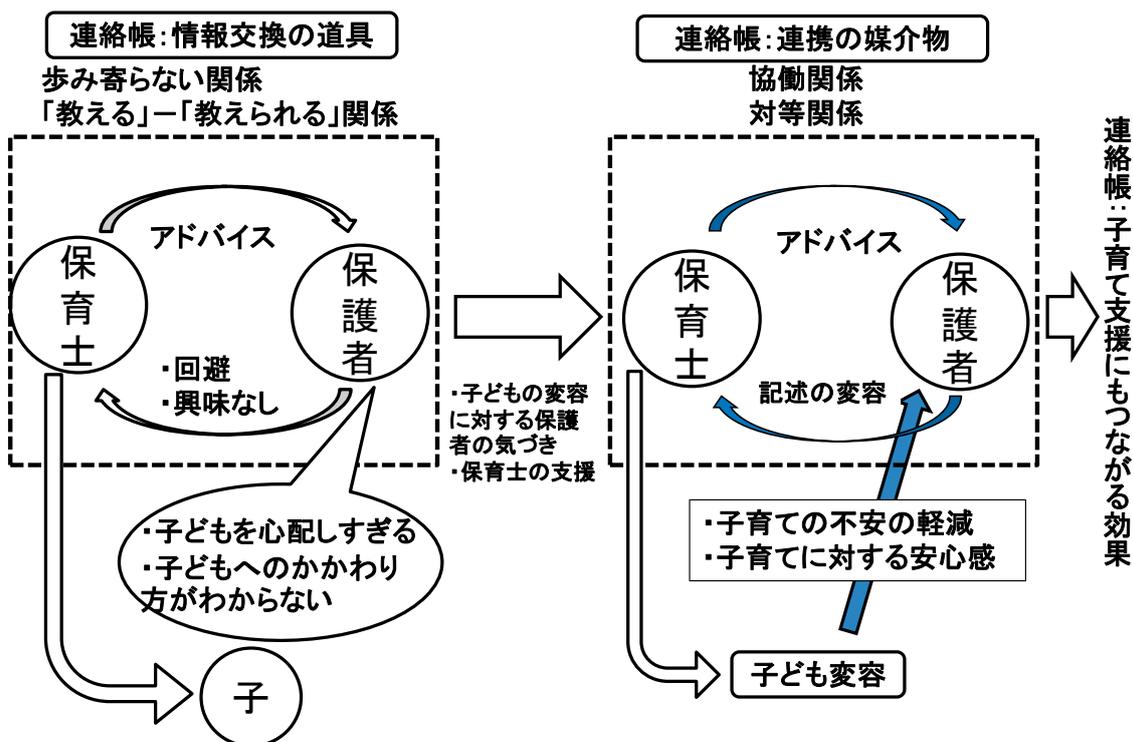


図 1 保育士と保護者の関係性及び子どもの変容に伴う連絡帳の機能の変容

(2)本研究の限界と今後の展望

最後に、本研究の限界を示す。第一に、本研究では五事例を詳細に検討したが、より分析対象を増やすことで、連絡帳を用いて保育士が保護者と連携して子どもに支援する過程を類型化することも可能となるのではないかと考えられる。第二に、本研究では、対象児が転園したり、対象児が離乳食を食べられるようになった時点で調査を終了した。今後は、調査期間をより長く設定し、縦断的に「食事の連絡帳」での保育士と保護者のやりとりを検討することで、保育士が保護者と連携して子どもに支援する過程を年齢や発達の違いによって捉えることもできるだろう。

引用文献

- Deborah, E. 2001 Parent Involvement : It's Worth the Effort, *Young Children*, July, 65-69.
- 江田節子 2006 「幼児の朝食の共食状況と生活習慣, 健康状態との関連について」『小児保健研究』第 65 巻 1 号 55-61 頁
- 高向山・若尾良徳 2015 「保育所と家庭を結ぶ連絡帳—対人コミュニケーション機能に注目して—」『常葉大学健康プロデュース学部雑誌』第 9 巻 1 号 93-98 頁
- Gonzalez-Mena, J. 2013a *Child, Family, and Community : Family-Centered Early Care and Education (6rd Edition)*, Person Education, Inc.
- Gonzalez-Mena, J. 2013b *50 early Childhood Strategies for Working and Communicating with Diverse Families(3rd Edition)*, Person Education, Inc.
- Gonzalez-Mena, J., & Bhavnagri, P. N. 2000 Diversity and Infant / Toddler Caregiving, *Young Children*, September, 31-34.
- 後藤美代子・鈴木道子・佐藤玲子・鎌田久仁子・阿部由希 2006 「ライフステージごとの栄養と健康—保育園児の食物の好き嫌いと健康に関する研究—」『尚絅学院大学紀要』第 53 巻 97-102 頁
- 後藤美代子・鈴木道子・佐藤玲子・鎌田久仁子・阿部由希 2007 「保育園児の食生活に対する保護者の関わり」『日本食生活学会誌』第 17 巻 4 号 336-341 頁
- Habermas, J. 1981 *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bd. 1/2, Suhrkamp (岩永正博・藤沢賢一郎・徳永恂・平野嘉彦・山口節郎訳 1986 『コミュニケーション的行為の理論(中)』未来社)
- Habermas, J. 1983 *Moralbewußtsein und kommunikatives Handeln*, Suhrkamp (三島憲一他訳 1991 『道徳意識とコミュニケーション行為』岩波書店)
- 林悠子 2009 「連絡帳の記述に見る保護者と保育者の関係変容過程」『乳幼児教育学研究』第 18 巻 121-132 頁
- 林悠子 2015 「保護者と保育者の記述内容の変容過程にみる連絡帳の意義」『保育学研究』第 53 巻 1 号 78-90 頁
- 広沢洋子・清水玲子・角藤智津子 1996 「保育者と保護者の相互交流—連絡帳を通して—」『運動・健康教育研究』第 6 巻 1 号 8-14 頁
- 今井靖親・中村年江 1990 「幼児期の子育てに関する親の悩み」『奈良教育大学教育研究所紀要』第 26 巻 25-33 頁
- 伊藤優 2013 「保育所の給食場面における保育士の働きかけの特質」『保育学研究』第 51 巻 2 号 211-222 頁
- 伊藤優・七木田敦 2014 「経験年数による食事場面における保育者の食事指導意識の差異」『小児保健研究』第 73 巻 1 号 21-27 頁
- 片山美香 2010 「保育士がもつ慢性疾患患児の保育への意識に関する研究」『保育学研究』

第 48 卷 2 号 39-50 頁

河原紀子 2004 「食事場面における 1～2 歳児の拒否行動と保育者の対応：相互交渉パターンの分析から」『保育学研究』第 42 巻 2 号 8-16 頁

河原紀子 2009 「保育園における乳幼児の食行動の発達と自律」『乳幼児医学・心理学研究』第 18 巻 2 号 117-127 頁

河原紀子・根ヶ山光一 2014 「食事場面における 1, 2 歳児と養育者の対立的相互作用：家庭と保育園の比較から」『小児保健研究』第 73 巻 4 号 584-590 頁

Kieff, J., & Wellhousen, K. 2000 Planning Family Involvement in Early Childhood Programs, *Young Children*, May, 18-25.

松生泰子・佐田恵子・恵村洋子・梶美保・豊田和子 2007 「食の意識調査と“食援助プログラム”に基づく実践改善—乳児保育の質的向上をめざして—」『保育学研究』第 45 巻 2 号 115-124 頁

師岡章 2010 『保育者と保護者の“いい関係”—保護者支援と連携・協力のポイント—』新読書社

中谷奈津子 2006 「子どもの遊び場と母親の育児不安—母親の育児ネットワークと定位家族体験に着目して—」『保育学研究』第 44 巻 1 号 50-62 頁

二宮祐子 2010 「保育者-保護者間のコミュニケーションと信頼—保育園における連絡帳のナラティブ分析」『福祉社会学研究』第 7 巻 140-161 頁

小口将典 2009 「3-4 歳児の保育所における食育—家庭への支援を見通した実践に向けて—」『医療福祉研究』第 5 巻 33-43 頁

大森世都子・八倉巻和子・高石昌弘 2000 「幼児の食生活に関する研究—保護者および保育園長の食意識の比較—」『小児保健研究』第 59 巻 1 号 72-82 頁

大岡貴史・内海明美・向井美恵 2013 「乳幼児の保護者が感じる食行動の問題点と食事の楽しさとの関連」『小児保健研究』第 72 巻 4 号 485-492 頁

斎藤愛子・中津郁子・栗飯原良造 2008 「保育所における「気になる」子どもの保護者支援—保育者への質問紙調査より—」『小児保健研究』第 67 巻 6 号 861-866 頁

関島香代子 2012 「子育て期早期にある女性の身体的健康」『母性衛生』第 53 巻 2 号 375-382 頁

島津礼子 2014 「地域子育て支援センターにおける保育への保護者の参加と協同」『広島大学大学院教育学部研究家紀要第三部 教育人間科学関連領域』第 63 号 101-110 頁

白石京子 2014 「子どもの育ちと保護者支援—保育相談からみえる子どもの発達支援と包括的支援—」『生活科学研究』第 36 巻 53-64 頁

高尾優・足立奈緒子・松本麻衣・池本真二 2010 「保育園児への食育介入および保護者への教育介入の有効性に関する検討」『日本栄養士会雑誌』第 53 巻 3 号 32-37 頁

高杉展 2009 「連絡帳という記録をどう読み取るか」『保育学研究』第 47 巻 2 号 144-146 頁

- 田中昭夫 1997 「幼児を保育する母親の育児不安に関する研究」『乳幼児教育学研究』第 6 巻 57-64 頁
- 外山紀子 2008 「食事場面における 1～3 歳児と母親の相互交渉：文化的な活動としての食事の成立」『発達心理学研究』第 19 巻 3 号 232-242 頁
- 上田公代 2007 「乳児を持つ母親の育児に対する否定的感情と子育て支援に関する研究」『熊本大学医学部保健学科紀要』第 3 巻 25-35 頁
- 吉田隆子 2012 「幼児の食行動に関する研究—子どもの視点から見た食事場面の意味—」『日本食生活学会誌』第 22 巻 4 号 325-330 頁